

文化庁・平成22年度文化芸術創造都市推進事業

# 創造都市ネットワーク会議

## 要約

実施：平成23年1月10日

会場：Art Theater dB KOBE  
神戸市長田区久保町6-1  
アスタくにつか4番館4F

主催：文化庁、NPO 法人都市文化創造機構

共催：神戸市

協力：大阪市立大学都市研究プラザ  
NPO 法人 Dance Box

記録者：NPO法人都市文化創造機構

## 《あいさつ》

挨拶は主催者代表の近藤誠一氏（文化庁長官）、共催自治体の齊木崇人氏（神戸市統括官）、主催NPOの佐々木雅幸氏（都市文化創造機構理事長・大阪市立大学教授）の3人が行いました。

### ○近藤誠一氏（文化庁長官）

ご紹介にあずかりました文化庁長官の近藤誠一でございます。主催者を代表してひと言ごあいさつをさせていただきます。また共催いただいた神戸市に心から感謝を申し上げます。

成熟した民主主義社会にあって、新しい公共とか地方主権とかを言う中で、日本がこれから見つけ得る活路があるとすれば先端技術と文化芸術だろうと思います。特に文化芸術につきましては、日本には各地域に伝わってきた伝統的な芸術、芸能があります。同時に、わずか150年の間に日本はヨーロッパの文化を導入し、十分昇華しています。そうした文化的資源をフルに使っていくことは、もはや東京一極主義のピラミッド型の国の運営では成り立たないと思います。地方がそれぞれの特色を生かしてネットワークをつくることで国全体が前進していく、そういう時代に入りつつあると思います。

そういう先駆的都市を、文化庁は平成19年度から長官表彰等のプログラムによって支援してきました。今6つのモデル都市というのがございます。仙北市、横浜市、金沢市、栗東市、神戸市、そして篠山市です。大きな都市だけではなく小さい農村、市町村も続々と手を挙げて創造都市に向かっている、そういう雰囲気を感じております。本日のネットワーク会議が積極的な成果を生み出すことを祈念いたしまして、私のごあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

### ○齊木崇人氏（神戸市統括官）

ようこそ神戸においでいただきました。心から歓迎申し上げます。ただいま紹介いただきました神戸市の統括監の齊木でございます。

神戸市は現在、創造都市戦略「デザイン都市・神戸」を推進しています。この取り組みは六甲山や海、田園など豊かな自然環境に加えて、旧居留地などの歴史的資源や街並み、さらには神戸開港以来西洋文化をうまく取り入れてきた暮らしの文化、そして洋菓子や洋家具・アパレルなどに代表されるものづくりの技術、これらをデザインの力で新たな魅力や活力を

創造するものです。2008年10月にはこうした取り組みが評価され、ユネスコ創造都市ネットワークのデザイン分野への加盟が認定されております。

このような創造都市戦略「デザイン都市・神戸」の拠点として、私たちは歴史的建築物である旧神戸生糸検査所を取得しました。仮称ではありますが、デザイン・クリエイティブセンターKOB Eとして活用するプロジェクトが今進んでおります。昨年は5月から10月までの半年間、デザイン、アート、メディア、食文化など多様な団体による100を超える実験的プロジェクトが展開されました。現在、建物の改修工事が進んでおりますが、積み重ねられた人材や活動、ネットワークを平成24年度のオープンにつなげたいと思っております。

最後に、この創造都市ネットワーク会議の場が、日本を超えてアジアや地球社会のクリエイティブ・シティに携わる皆さんとの連携交流、そして新たな発見の場になることを祈念しまして、私のあいさつとさせていただきます。ありがとうございます。

○佐々木雅幸氏（NPO法人都市文化創造機構理事長・大阪市立大学教授）

佐々木でございます。きょうは大変寒い日になりまして、飛行機が飛ばないのでちょっとおくれるという連絡もいただいております。遠くから来ていただいた方、本当にありがとうございます。

最初に神戸との関係についてお話ししたいと思います。2003年に大阪市立大学が創造都市研究科という大学院をつくって、私が創造都市論の授業を始めました。そうしましたら、一番熱心に来られたのが神戸市の職員でした。なぜそんな熱心に来られるんですかと伺いましたら、当時の企画部長だったと思いますが、大震災の復興が大体2005年ぐらいにはめどがつく、その次の方向として創造都市を神戸で具体化したいんだということを言われました。それ以来、さまざまな形でおつきあいさせていただいています。

さて、昨年11月に「文化芸術創造都市事業の推進に関するアンケート」を行いました。36の関係する自治体を対象として半数の回答がありました。（途中割愛。アンケートの結果報告については別紙「報告書」を参照ください）。今後の課題ということでは「基本理念の確立」「方針の確立」「推進体制の確立」「財源確保」「ネットワークの確立」等々が挙げられました。私どもは特に最後の創造都市ネットワークを確立することが大事だと考えておまして、きょうの第3部では、どんな方向で確立したらいいのかということについて提案します。皆さんから忌憚のないご意見をいただければありがたいと思います。

最後になりましたが、大変なお忙しさの中、会議をサポートしていただいた神戸市の皆さま

んに心から御礼を申し上げます。そしてまた、このお忙しい年始のときに、自治体のトップに3名来ていただきました。木曾の田中町長、仙北市の門脇市長、そして中之条の入内島町長、大変ありがとうございます。

## 《第1部 事例発表》

事例発表は兵庫県篠山市の森岡武氏（篠山市文化芸術創造農村実行委員会）、秋田県仙北市の門脇光浩氏（仙北市長）、石川県金沢市の水野雅男氏（金沢市クリエイティブツーリズム実行委員会・金沢大学教授）が行いました。いずれも今年度から始まった文化庁のモデル都市事業に認定された自治体です。コメンテーターは太下義之氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング／芸術・文化政策センター長）と河島伸子氏（同志社大学教授）です。

### ○森岡武氏（篠山市文化芸術創造農村実行委員会）

今回は、ある小さい集落に創造都市のモデルを当て込んで、創造農村という取り組みが展開できないかとアプローチした報告をさせていただけたらと思っております。

篠山市は、今皆さんがいる神戸からほぼ真北へ上がった所です。真ん中に城下があって、周辺の農村も含めて多様な文化が形成されている所です。人口は4万5000人ぐらいですね。2009年（平成20年）1月、第2巡目で創造都市の文化庁長官表彰をいただきました。それを契機にユネスコ創造都市ネットワークの認定を目指そうと、いろんな取り組みをしてまいりました。

都市と農村では創造性の展開が違うのじゃないか、というのが我々の動機でして、「創造農村とは、コミュニティが持つ豊かな創造活動に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、地域に根ざした革新的で柔軟な経済システムを備え、ローカルな地域社会や、あるいはグローバルな環境問題の課題に対して、創造的問題解決を行えるような『創造の場』に富んだ地域である」といった考え方で今取り組みを進めています。

都市の場合は、都市ストックを活用した拠点において、インターフェースとしての文化芸術であったり、コンテンツとしての文化芸術、ストーリーとしての文化芸術というもので集客すると、周辺人口が多いので「顧客数×顧客単価」という計算式がグローバルマーケットまで広がります。ところが創造農村で「顧客数×顧客単価」という計算式を考えますと、周

辺の人口が少ないので、経済効果を高めるには顧客の単価を上げないといけない。そうすると本物であったりクオリティーの高いものを提供しないと勝負ができない。そこで、第一次産業を中心とする「クリエイティブ暮らす」を取り戻すことが大事になると考えています。

丹波篠山築城400年祭を契機にいろんなまちづくりを進めております。伝建地区でこういったアートフェスティバルが始まりました。町家をアーティストに開放してまち並みを享受するというイベントなんですけど、少しずつ提供していただく古民家がふえてきています。見てのとおり入り口を開けて町家を開放していただきますので、アートというインターフェースを介して町家の奥行き感みたいなのを共有できたかなと思っております。これも1万人を超える集客力を持ったイベントでございまして、かなり定着しております。

「ささやマルシェ」という味祭りが秋口にあるんですが、これもまちなかを使ったイベントです。食を求めてやってきた住民に対して、ちょっとメイン会場からは距離があるんですが、集客並びに流動性を呼ぶ取り組みです。あと、古民家の再生をしているんですが、世界的なインダストリアルデザイナーの喜多俊之さんに町家を購入いただいて、ギャラリーをオープンしていただきました。さらにPLUGさんという神戸を拠点に活動してた若い集団が篠山を気に入られて、元旅館をギャラリーに変えていろんなクリエイティブな活動をされております。堀の近くにある「ことり」というのは、岩茶というお茶の茶房なんですけど、ボランティアで直しております。「はくとや」は、先に改修が進んでいた大きな古民家と雑貨屋を営む方をマッチングした雑貨屋さんです。

これが限界集落のプロジェクトです。(丸山地区の)3軒の空き古民家を1棟5万円ないし6万円の1棟貸しの宿に改修して活性化に寄与しようとする事業です。古民家再生ではなく、集落再生と位置づけております。集落で作ったLLPという会社が宿の運営をして、対外的なアプローチは中間支援に特化した一般社団法人ノオトとの連携でやっています。中は床暖を入れたり、水回りにちょっと手を入れたりというレベルの改修にとどまっております。

それと、篠山の文化を体験していただくツーリズムを小ロットで展開しております。これは能舞台で狂言のワークショップをしてるところですが、見てのとおり参加者5名です。お正月の準備をする縄なえ、地元にある陶芸、ブリキの工場のブリキ、端切れを接ぎあわせた実にアーティストックな米袋、こういったワークショップを、地域のDNAを掘り起こす目的とあわせてやっております。

こうした全市的な取り組みを小さな集落に落とし込んでみるというのが今回のモデル事業です。後川(しつかわ)という集落で、この春地元の小学校が廃校となりました。細い谷筋

に寄せ集まって暮らすような地域で、四方山に囲まれております。人口491人、世帯数177、古くは東大寺領の荘園でした。平家の落人がつくった籠坊温泉など歴史的な資源がたくさんありまして、今なおクオリティーの高さは篠山でも随一ではないかなと思っております。

ここに若い研究者、スタッフが入って、地域資源やニーズの調査を行っています。さらに田舎暮らしの体験をしようということで、里山のセミナーハウス、里山キャンプなどを進めております。年末に廃校の大掃除というプロジェクトをしました。そこからいろんな活用方法を見出す部会を立ち上げたり丁寧な研究会をしたりしてます。

評価の枠組みですが、地域の方々が地域資源を認識するプロセスが1つ。もう1つは地域課題に対して創造的な解決方法を提供して、関係性を築いていくことだと思っております。従来の指標は「顧客数×顧客単価+波及効果」でした。これは都市間競争という奪い合いです。目指す指標は「顧客数×関わり度数+波及=地域を愛する人×次の活動につなげる+暮らしの見直し=クリエイティブ暮らす」です。

農村では文化芸術は消費の対象ではなく、もともと暮らしの延長線上にある気づきとか、感謝とか、祝いとか、祈りとか、愛しみとか、畏敬などのアウトプットであって、これをコミュニティで再共感させて、その創造性を高めることが次の創造活動につながっていくのではないかと考えて取り組みを進めております。

時間が来ましたので、以上で終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

#### ○門脇光浩氏（仙北市長）

「創造農村仙北市を目指して」ということで、少しご紹介をしたいと思えます。

仙北市は平成17年に合併してできたまちです。以前は田沢湖町、角館町、そして西木村という3町村でした。仙北市になって、全国の会議に行くと、仙北市ってどこにあるんですかってよく言われるんですよね。田沢湖です、武家屋敷の角館ですと説明します。小さなまちです。今回の国勢調査で3万人を切ったと思えます。観光客の入り込み数は550万人ぐらい。これは北東北では結構大きめのボリュームだと思います。歴史と文化がとても色濃く残っているまちで、たくさんの楽しみがあります。つい最近では全国のフィルムコミッションの方々がお集まりくださいまして、JFCの総会なども開催していただきました。

少し写真を見ていただきたいですが、桜並木、これ角館の売りの部分です。しだれ桜がずっとあったり、武家屋敷があったり、それからお祭り、これ山車、曳山なんですけども、角館町内、18町内から山車が出て、通行権を争って結構ぶつかりっこというんですか、するわ

けです。とても勇壮なお祭りということで大変観光客の方々に喜ばれています。このお祭りがあるから若い方々が地元にいる、もしくはこのお祭りがあるから帰ってくるという数は相当数あると思います。

この紅紫というか赤色はカタクリの花です。20ヘクタールぐらいの林地にカタクリが咲きます。白い花、これはミズバショウの群生地です。これは紙風船上げといいまして、一説には平賀源内さんが鉱山の技術指導で仙北のほうに訪れた際に伝えたという熱気球の原理を用いた遊びです。年々巨大化していきまして、そこに美人画だったり武者絵を書き込んで、打ち上げています。それから、横の写真は、これは雪祭りの写真ですね。かまくらが写っています。これは田沢湖の高原地域にあるスキー場です。県営スキー場ですが、北東北では一番いいスキー場かなと言われていきます。向こう側に見える湖、これが田沢湖です。

もう少し写真をごらんください。火の輪っかが見えますけども、これは火振りかまくらという無病息災のお祭りです。この火の粉を体に浴びると風邪をひかないと言われていきます。これは修学旅行体験です。子どもたちが一般の農家やわらび劇場で民謡の勉強だったりをしています。横の小さな写真は、フィルムコミッションで誘致をした「たそがれ清兵衛」のロケです。これはたざわこ芸術村です。さっき演劇や民謡の手踊りなんかを練習していたわらび劇場、地ビール工場、森林工芸館、温泉、ホテルなど、たくさんの施設があります。

それで今回モデル事業で取り組んでいることですが、文化芸術が地域活力創造と雇用創出に寄与するという実証をしたいと考えています。ネットワークとプラットフォームづくりは今一生懸命やっています。1番から6番まで事業内容を少し書きました。私たちが直接主催しているのは1番の連続講座です。これは地元の特徴とか文化的資源、これからの秋田にかかわることで4カ月間ぐらいやっています。2番が、これはわらび座さん中心ですが、拠点劇場の可能性についてお話しをさせていただいております。例えば劇場法であったり舞台芸術振興ビジョンであったり文化芸術基本法の第3次案であったりということで結構アカデミックな関係の話です。3番目のフォーラム、これは愛媛県の東温市に坊ちゃん劇場がありまして、そこの交流です。4番、5番、6番は大体こんな話であります。

#### ① 文化・観光を活かしたまちづくり「連続講座」開催

- (1) 市長基調講演「時間旅行はいかが？」
- (2) フォーラム「歴史・文化・観光によるまちづくり」
- (3) フォーラム「伝統芸能とモーションキャプチャ」
- (4) フォーラム「市民参加型のアートプロジェクトの夢—もうひとつの秋田」

- ② フォーラム「地域拠点劇場の可能性」
- ③ フォーラム「劇場が紡ぐ仙北市・東温市交流の翼」
- ④ 「ジャパン・フィルムコミッション」第二回全国総会協賛
- ⑤ 仙北市伝統文化活性化委員会「仙北芸能の魅力再発見！」協賛
- ⑥ 「秋田の宝・名人芸&元気してらがフェスティバル」協賛

創造都市、創造農村への関心というか、確かに地域の方々の思いが少しずつ膨らんできたのは感じています。課題としては、仙北市、実はさっき3町村の合併といいますけども、昭和の大合併のときには9町村あったんです。各々の旧町村ごとに地域運営体というものをつくっていきまして、そこでの文化活動や支え合い活動が行われています。そうした足元と、それから広域的な観光の視点からと、複眼的な政策をやっていこうと考えています。

来年度、あきた文化ルネサンスということで、県のほうでアート・プロジェクトを立ち上げる話が今進んでいます。とても楽しみにしています。2014年には国民文化祭を秋田県にぜひ誘致したいということで、こうなると仙北市は、例えば民謡の宝庫であったり手踊りの発祥の地であったりということですから、秋田市と同じように中心地として文化祭に参加できるのではないかと考えています。

まんずいっぱいしゃべったんすども、わかんねば後からいっぺえ質問受けるすから、よろしくをお願いします。

#### ○水野雅男氏（金沢市クリエイティブツーリズム実行委員会・金沢大学教授）

金沢クリエイティブツーリズム実行委員会という組織でこのモデル事業を進めております。市民セクターが行政セクターとどう連携してクリエイティブシティに取り組んでるかという事例をご紹介したいと思います。

昨2009年度に大きな動きがありました。1つは金沢市がユネスコの創造都市ネットワークのクラフト部門に登録されました。それと歩調を合わせて金沢アートグミというNPO法人が設立されました。これは金沢市内のアート情報を集積して、それを発信していこうというものです。さらに独自のギャラリースペースを持って、その管理運営もします。もう1つはチャリd eアートです。金沢は車で回するには不便なまちでして、バスで回るにもちょっとです。そこで、自転車をコミュニティサイクルとして提供してアートスポットを回ってもらおうと。これも2009年5月に活動を始めました。こういう動きを受けて金沢クリエイティブツーリズムができないかという実験を始めたわけです。



プロジェクトのねらいは、1つは金沢21世紀美術館と金沢アートグミという市民セクターが連携する仕掛けをつくることです。金沢アートグミでは金沢市内で活躍しているアーティストとか工芸作家などのポートフォリオ、作品集、あるいはその情報を蓄積して、アーカイブを構築しています。一方で金沢21世紀美術館はまちに開かれた美術館というコンセプトをもっています。そこをつないで、21世紀美術館を訪れた方がまちなかに展開するようにしたい。それはアート、クラフトのマーケットを東京一極集中から金沢に持ってくることであります。バイヤーとかコレクターが工房や作家を訪ね歩くことによって、ビジネスが生まれるようにということです。もう1つは、21世紀美術館とか兼六園とか武家屋敷だけじゃなくて、まちなかを周遊する滞在型の都市観光に移行するねらいを持っています。

プロジェクトは大きく4つありまして、1つはオープNSTAジオデーです。ある特定の2日間、市内で協力してくださるアーティストとか工芸作家のスタジオをオープンして、その作家の都合のいい時間だけ開けといていただいて、見学したい人が自由にめぐる。昨年10月、そしてことしの2月に行います。もう1つは金沢アトリエ訪問です。これはガイドつきで、作家のアトリエを訪ね歩くというものです。これも昨年11月、今月末に予定されています。もう1つのガイドツアーは金沢建築訪問です。金沢市内には歴史的な町家とか近代建築とか、あるいは茶室とかが残ってるわけですね。そういうところを訪ね歩きます。

定員は10人前後です。小グループで丁寧に回るということです。3つのプログラムを推進することによって、協力してくださるアーティストとか工芸作家とか、あるいは町家の所有者のアーカイブをつくっております。それを発展させる形で4つ目のプロジェクト、アートコンシェルジュに取り組もうということです。金沢を訪れた方の要望にこたえて訪ねたいところ、工房とか町家とかをアレンジしてあげるというものです。いわゆるプライベートツアーを提供するというものですね。

オープNSTAジオデー、昨年10月にやったときには約10名ぐらいのアーティストが協力してくれました。アトリエ訪問の1回目は21世紀美術館館長の秋元さんがエスコート役になりまして、2人の若手のアーティストの工房を訪ねました。1人は山本基さんといって、世界に飛び回ってる作家です。もう一人は牛島孝さん。ふだんわからない、制作している様子とか考え方とか、そういうものをじっくり聞けるわけですね。金沢建築訪問は先月行いました。これは建築評論家の五十嵐太郎さんがエスコート役になりまして、村野藤吾氏の設計の建物2つと、それと内藤廣さんの設計した建物を見学するというツアーでした。

今紹介しました建築訪問とアトリエ訪問、合計2回やり、22名の参加者です。性別でいう

と女性のほうが多いですね。関心を持ってくださる方が多い。住まいでいうと、金沢市内の方が7割ぐらいいらっしゃって、県外はまだ4人。ただ、それでも東京とか静岡県とか隣の高岡市とかそういうところからも参加いただくようになりました。

課題ですが、正直申しましてまだ金沢21世紀美術館とどういうふうにクリッツで連携していくのかということが模索中です。あるいは告知についてもチラシを印刷して、それを美術館とかギャラリーとかに送付しているんですが、まだ効果的な結果が生まれてないので、それをもう少し模索しなければいけないと思いますし、アートコンシェルジュ、来月やってみますけども、実際どのぐらい需要があるのかということもまだ見えない状況なので、それももう少し把握する必要があると思います。

○太下義之氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング／芸術・文化政策センター長）

今、この第1部で3つの取り組みをご報告いただいたわけですが、共通点が3つぐらいあるのかなと思いました。1つは文化芸術、クリエイティビティというものがまちづくりにも大きな貢献をしているということ。2つ目は、そのことが観光振興ですね、よそから人を引きつける魅力につながるということ。3点目は、そういうまちづくりなり観光振興的な取り組みが、結果として新たな産業振興であったり、雇用の創出につながる可能性が見えているということです。

例えば、まちづくりということで具体的なお話をしますと、篠山市さんはまちなかアートのような形をやってらっしゃいます。実は、今日本全国でたくさん似たような取り組みがあるわけですね。数えていくと多分100以上になるんじゃないかと思います。直近でいうと去年、瀬戸内で国際芸術祭があったりとか、非常に地域と密着した取り組みが日本で盛んに行われてるわけです。海外で行われるこういうアートフェスティバルというのは、余りコミュニティとか地域に深くかかわっているように見えないんですね。地域とかなり密接な関係を結んでいるのが、実は日本の大きな特徴じゃないかなと思ってます。こういう日本の特徴をもっと生かす形で、世界に逆発信するポテンシャルもあるんじゃないかと思います。

それからツーリズムですが、金沢市さんが建築訪問をやっていらっしゃる。日本の建築といますか日本人建築家の評価が世界的にも高いんですね。賞も数々とってますし、海外の主要なミュージアムの最近の新築なんかは日本人の建築家の登用事例が非常に多いです。何でこんなに高く評価されているのかと考えますと、建築というのは法規とか合理的に解決しなければいけないことがたくさんあるわけですが、そういう堅い部分と、感性、クリエイテ

イビティという柔らかい部分とのバランスをとるのが日本人は得意なんじゃないのかと思います。そういった意味で建築訪問は、ほかの自治体さんでも取り組める魅力あるメニューじゃないかなと思いました。

キーワードの3点目で産業とか雇用という点ですけれども、やはり仙北市のわらび座さんの事例が一番特徴的じゃないかなと思います。ご案内のとおり、もともとは何もなかったところに新たに劇場をつくり、そこから宿泊を中心に地ビールの生産であるとかいろんな産業を開発していく形で、全く新しい経済循環というものを生み出しつつあるんじゃないかと考えています。これは1つの事例だと思いますけれども、クリエイティビティとか文化というのが、周辺でそういった産業とか雇用といったものを創出したり活性化する力を秘めている1つのあらわれだと思います。

#### ○河島伸子氏（同志社大学教授）

きょうは大変興味深い事例を3つもご報告いただきありがとうございました。最初の2つの例にいたしましても、人口的にはわずか3万人とか4万5,000人とおっしゃいましたか、小さい規模であれだけの活動をやっているということは本当に驚きでして、きょういらっしゃっている会場の方々も、大いに元気づけられたのではないかと思います。一方、金沢はもちろん大都市ではありますし、もともと注目されている都市の事例でしたけれども、内容的には地道に小さなところからやってらっしゃるお話でして、非常に成熟した、NPOとしての活動ということで、これも皆さんが勇気づけられる事例だったと思います。

この10年、20年で日本の経済はどちらかというと元気はなくなりましたけれども、文化のほうはむしろ元気づいてるのではないかなと思います。それも10年前、20年前ですと文化行政というのは箱物を建てるのが中心で、ソフトの充実がないということをさんざん研究者や実務家の人たちは、文化経済学の学界では議論していました。そうではなくなってきたということを今日は本当に実感できて、心強く思いました。

第2部の他の発表も伺った上でいろいろと課題を引き出していきたいので、幾つか気になったことをお三方のうちのどなたからでも伺えたらと思います。

1つは、やはり篠山の事例では森岡さんご自身が相当のキーパーソンだろうなという印象を受けました。これだけの小さいまちであれほど大きな事業をいろいろやって、こんなに立派なプレゼンができる方、それは理念があるからだと思うんですね。理念と実行力と、それと非常に森岡さんご自身がクリエイティブなアイデアをたくさんお持ちです。そこで、キー

パーソンの存在ということについてどのようにお考えかというあたりを、ほかの方も含めて伺いたいと思います。

それからもう1つ、金沢の水野先生のご発表にもありましたけれども、公立の文化施設である21世紀美術館との連携を今後どうしていこうかということが出てきました。皆さんNPO的な活動をしていらっしゃるの、行政との連携がまだまだ難しいところがあるのか、それとも大分行政のほうも変わってきたのか、今後の課題について伺いたいと思います。

#### ○森岡武氏

篠山の場合、私は全然キーマンではなくて、きょう来ている若いスタッフも含めて、実に志の高いメンバーが集まっているのが大きな特徴です。最後はやっぱり人と人が活動するのがまちでございますので、ピュアな部分でよくしたいとかよくなろうという人たちがくっつかないとうまくいかないと思っています。そういう意味で篠山は文化土壌も高いですし、人口4万5,000人にしてもかなり元気のある方、思いのある方がたくさんおられますので、それで、ノオトという中間支援組織ができたのかなと思います。

あと、行政との連携ですが、トップが替わったり考え方が変わると、違った方向へ行くというのはかなり経験してきました。ですので、プレーヤーを育てて内発的な活動につなげていく必要があります。行政も入って、多様なステークホルダーがそれぞれの役割を分担して得意分野を進めていかないと、多分立ちいかなくなってきてるのではないかなと思います。

#### ○門脇光浩氏

キーパーソンを育成するのはかなり難しい場面があって、実は昨年からは意識的にやることがあります。さっき話した地域運営体という考え方です。これはコミュニティ組織と考えていただければありがたいです。その地域、地域の問題を自分たちで解決していこうという仕組みです。当然お金がかかるわけですから、人口の大小にかかわらず1団体年間500万円という交付金を充てています。ひもつきの財源ではなく、自由にやっていただく。そういう中で、若い方々の意見と、それから年寄りの方々の地域での意見の対立が必ず出てきます。こういうところがむしろしめしめと思っています。

それから、行政とのかかわりというのは難しい部分があって、行政が芸術的な話に首を突っ込んだりデザインの話をしたりすると全くとんちんかんになると昔から思っています。

○水野雅男氏

このクリエイティブツーリズムの前に金沢市は文化行政担当課がクラフトツーリズムに取り組みました。それを見てると、我々がやってるガイドツアーとよく似てるんだけど、似てても非なるものだと思ったんですね。今おっしゃったように、創造的なものは行政機関は得意じゃないと私は思っています。

キーパーソンは金沢の中には何人もいまして、そういう人たちがディスカッションしながら若手のアーティストを育てていくことに取り組み始めたのがすごく成果だと思っています。結果の1つがクリエイティブツーリズムなわけですし、バイヤーとかコレクターが金沢に来ることによって情報が金沢にもたらされて、金沢美術工芸大学とか、あるいは卯辰山工芸工房の卒業生たちが金沢について制作活動を続けられる、その成果もねらっています。

このモデル事業をやらせていただいたおかげでこの実行委員会を立ち上げて、それぞれのキーパーソンがネットワークをつくって、いわゆるそういうことをディスカッションして行動を起こすプラットフォームができてきたということが成果としてあります。

もう一方の公的な人たち、あるいは公的な組織とどう向き合うかですけども、それもこのモデル事業のおかげで評価委員会を受けなさいとなって、それで金沢美術工芸大学の学長とか、あるいは21世紀美術館の館長とか、そういう方々にも入ってもらって、今これから議論していくわけですね。そういう土俵をつくった。これから評価委員会を経由して我々がやることとどう連携していったらいいのかということをやらなにも考えてもらうようになっていくことを期待しています。できれば、モデル事業もう一年あるとそれがもっと結実するんじゃないかなというふうに個人的に思います。

○太下義之氏

河島先生からの問いかけで、やっぱりキーパーソンというのは非常に大事ななということをお三方のお答えの中からも改めて感じたところです。仙北市の門脇市長が、行政は文化的じゃないとかクリエイティビティじゃないとおっしゃってましたけれども、そう言い切ってしまうと身もふたもないとか、先の議論もなくなっちゃうので、行政も含めたいろんなセクターのクリエイティビティというものがこれから大事なんだろうなと感じました。

その際に、人材の流動性がこれから日本社会でもっとあってもいいんじゃないかなというのをちょっと思ったところです。例えば、今までの流れとは別に都市から地方へとか、または民間から行政へとか、または大企業からNPOみたいな、従来だったら余りなかったよう

な人材の流れというのはもっともっと起こっていくべきかなと思います。そうすることで、個人の体験もふえるでしょうし、そういう新しい人材を受け入れた組織のクリエイティブティというものも増していくのではないかなと思います。

いささかきれいごとになるかもしれませんが、今回の不況の最中においては、むしろ逆に都市とか大企業とか安定志向じゃない形でクリエイティブな人材が新しいセクターに流れる1つの契機になればいいんじゃないかなと思います。

(休憩)

## 《第2部 パネルディスカッション》

パネルディスカッションは河島伸子氏（同志社大学教授）がモデレーターを務め、衣笠収氏（神戸市デザイン都市推進室主幹）、入内島道隆氏（群馬県中之条町長）、太下義之氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング／芸術・文化政策センター長）、近藤誠一氏（文化庁長官）がパネリストとなって行われました。

○河島伸子氏（同志社大学教授）

文化芸術創造都市の展開を語るということで、90分いただいております。まず神戸市デザイン都市推進室の衣笠さんから、デザイン都市の取り組み、モデル事業のご紹介をいただくということで、ご準備お願いいたします。

○衣笠収氏（神戸市デザイン都市推進室主幹）

まず、なぜデザイン都市なのかということをお話しさせていただきます。創造都市の礎として、市民一人一人に豊かな感性と創造力が必要です。そのために文化芸術の推進が重要になってきます。我々は創造力を社会に活かす仕組みをつくるのがデザインととらえております。まず社会的な課題を認識して、それに向けた目標やビジョンを明確にして、解決するための仕組みをつくる。重要なことは市民一人一人の創造力を「つなぐ」こと、そして成果を出していくことです。こういったプロセスをデザインととらえています。

今デザイン都市推進の拠点として、旧神戸生糸検査所を仮称デザイン・クリエイティブセンターKOB Eとして整備しています。この生糸検査所は、昔日本が生糸を輸出のメインに

していた時の施設で、2009年度に神戸市が国から買い取りました。建物は旧館、新館があって、トータル1万6,000平米です。今回この場所を使って文化庁のモデル都市事業を展開しました。ダンスボックスさんを中心にして、神戸大学さん、専門家の方、市民の方、マスコミの方が入って、パフォーミングアーツを通して歴史的建築物の活用なり、地域活性化、他分野への貢献の可能性を探っています。

モデル事業は6つのプロジェクトで展開しました。まず、製作室の整備・公開では、クリーンアップ大作戦として、美術系のアーティストとダンス系のアーティストが一緒になって、創作の場を提供してもらいかわりに、掃除をしました。建物の魅力を反映した作品制作を行い、滞在制作、制作プロセスの公開にもウエートを置きました。

続いて、喫茶・情報資料室ですが、アーティスト、市民が集って交流する場として展開しました。ここで美術系のアーティストとダンスが会って、美術系の作品を背景にしたダンス作品が生まれたり、市民の方々が直にアーティストと触れ合い刺激を受けました。

勉強室・学ぶ場の展開では、アーティストがみずから社会との接点を持つために、ワークショップの組み立て方や助成制度の仕組み、プレゼンの仕方などを学びました。

体験の場の提供ということで、老人ホームの訪問などをしました。痴呆症が進んで介護士さんが声をかけても反応しない方に、身体の動きを組み合わせると話しかけると振り向いた。あるいは長く車いすで、立ち上がることができなかつた方が、体を動かすことをきっかけに立ち上がることができた、というようなことがありました。それを一過性にしない仕組みとして、ダンサーが介護士さんに研修しました。

鑑賞の場です。これではいろんな場所にダンサーを配置して、建物ツアーを行いました。建物の特色を生かすということで、階段の踊り場であったり屋上であったり、そういったものをふんだんに使っています。この時は、アーティストも自分の出番が終わればそのツアーに参加して、相互鑑賞しています。

今こうしたプロジェクトに参加したアーティスト、市民に参加いただいて検証評価を行っているところです。では最後に、活動紹介の動画をごらんいただきたいと思います。

#### ○河島伸子氏

どうもありがとうございました。兵庫県には西宮市に立派な芸術文化センターが近年できていまして、そちらはメインストリームの芸術、舞台公演を中心にやってるんですけども、さすが神戸市、かなり違うタイプの活動をやっていらして、非常におもしろいと思いました。

それでは次に、より小さな自治体の事例として、群馬県中之条町長の入内島さんから中之条ビエンナーレなどのご紹介いただこうと思います。よろしくお願いいたします。

#### ○入内島道隆氏（群馬県中之条町長）

私どものまちは小淵総理が出ているまちです。そういうと大体、ああ、あの辺かなとわかっていたかと思うんですが、新潟県と長野県に接している北部のまちです。

中之条ビエンナーレというのを4年前に始めました。ことしで3回目になります。1回目が、延べで約5万人の方にご来場いただいています。2回目が約16万人。今回目標30万人ということにしています。町ですので予算も限られてますので、1回目、2回目とも1,000万以下の予算でやってます。少ない予算でどうしてできるのかというと、作家の方々の作品等は全部何もお支払いしないで展示していただいています。地域の方とのネットワークができたり、こういった現代アートを通して地域の方々が自信を取り戻していくというのは、北川フラムさんと全く同じコンセプトでやってます。

ビエンナーレのときは人が来るけども、終わってしまえば人が来なくなるという繰り返しですので、そこは何とか変えていかなきゃいけないと思ってます。それと、アーティストたちと接してみて、彼らは30代ぐらいまで一生懸命頑張るんです。アルバイトして、アルバイトしたお金全部つぎ込んで作品つくって全精力つぎ込むわけですけども、30超えてもそれをできるかということできなくて、大体普通の人に戻ってしまうわけです。

日本がこれからどういう力で日本を再生していかなきゃならないかといえ、やはりクリエイティブな力を使っていかなければいけない。そのためにビエンナーレに取り組んでいます。初めからわかってやっていたわけじゃありません。きょうも埼玉大学の後藤先生いらしてまんですけども、そういう方々にいろいろ教えていただいて、過疎地脱却モデルみたいなものをつくっていきたいと思ってます。

アーティストがどうしたらうちのまちに住んでくれて、クリエイティブな活動をしてくれるだろうかと考えたときに、やはり彼らが生活する糧といいますか、そういった場を提供することが必要だと思い、まちの中心部に「つむじtsumuji」（ふるさと交流センター）をつくりました。アート、雑貨、カフェ、横町、足湯とありますが、その運営をビエンナーレの実行プロデューサー、総合プロデューサーといったアーティストたちに全部任せてます。ですから、普通の店ではないんですけども、そのことによってまちが活性化されています。

地域の人たちに任せてしまうと、今までと同じ考えの延長線上で何とか立て直そうとする



わけですけども、それじゃ、もうできないとわかってますので、延長線上から一歩飛んだクリエイティブな考え方でまちづくりをしていく必要があるのかなと思ってますし、彼らもただ作品をつくるだけじゃなくて、まちづくりをデザインするというのも彼らの心の中ではやってみたいことの1つだと思いますので、そういう力を借りてやっています。

#### ○河島伸子氏

どうもありがとうございました。私、こちらはうかがったことないんですけども、ぜひ行ってみたいなと思いました。また細かいことで後ほど伺いたいと思います。

事例報告はここまでといたしまして、少し立場を変えて、シンクタンクでこのような創造都市及びもっと広く文化政策の研究やアドバイザーも努められている太下さんから、国内外の創造都市の特徴と動向ということで、お願いいたします。

#### ○太下義之氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング／芸術・文化政策センター長）

ご案内のとおり、ユネスコのクリエイティブシティズネットワークは7つの分野で、世界27の都市が認定を受けています。これらの都市を眺めると、言ってしまうと当たり前のことなんですが、よく知ってる都市とそうじゃない都市が混在してることに気がつきます。例えばデザイン分野のベルリンであるとかモントリオールとかなんかは、大抵知っています。一方で、この指定を受けなければ、一生名前を聞かなかったかもしれない都市も入っています。例えば、食文化の分野でコロンビアのポパヤンとか、スウェーデンのエステルスンドという都市とかですね。こういう2つのタイプの都市が混在してるということがユネスコのクリエイティブシティズネットワークの特徴じゃないかなと思ってます。

実はユネスコという機関が初めて経済、産業の分野にフォーカスしてつくった制度、これがクリエイティブシティズネットワークですね。ユネスコというと一般的に世界遺産の認定で有名ですけども、多分世界遺産というものが1つのヒット商品だとすると、それに続く第二のヒット商品だったんじゃないかなと思います。ただ、ユネスコという組織の特性を考えると、別に世界的な大都市を支援しようという思惑はそんなになかったわけです。むしろどちらかというと、聞いたことがないような中小都市だけでも実はクリエイティブシティとか文化の面で非常に輝いてる都市、これを支援していきたくかった。

支援というのは、そういう都市のネットワークをつくることによってお互いの学びを提供すること、同時に、ユネスコという1つのブランドを使ってクリエイティブシティズという

一種の称号を与えてブランド化すること、ですね。ただ、ふたを開けてみたら、ユネスコの思惑とは別に世界的な大都市が続々とエントリーしてきたという経緯なんです。

そういうユネスコの趣旨を考えますと、国内で今までクリエイティブシティズネットワークに認定された都市は、ご当地神戸市さんですか、または名古屋市さん、または金沢市さんとか非常にブランド力のある都市ですが、むしろ中小規模だけれども、世界的に輝ける可能性がある都市として、きょう参加いただいた皆さんが積極的に活用していくと非常におもしろいのではないかと思っています。

#### ○河島伸子氏)

どうもありがとうございました。きょうの創造都市ネットワークのさらに大きな背景にあるユネスコのネットワークについてのご説明があって、とてもよかったですと思います。

それでは次に、今回の会議の主催者の1つでもある文化庁長官の近藤さんにお話しいただきたいんですが、文化芸術創造都市という政策制度の生まれた背景とその概要についてご説明いただきたいと思います。よろしく願いいたします。

#### ○近藤誠一氏（文化庁長官）

まず、私個人と文化創造都市とのかかわりから始めたいと思います。2003年に、私、外務省の文化交流部長になりましたが、そのときにほかの国は文化を国づくりにどう使っているのかと関心を持ちました。そこで、既にEUが1985年から欧州文化首都を始め、そして1990年にグラスゴーがそのおかげでよみがえったことを学んで、さすがヨーロッパは早いなと思いました。そのうち2006年にユネスコに大使として参りました。そこでユネスコの創造都市ネットワークというものがあって、当時はまだ都市の数は10前後でしたが、神戸と名古屋がアプライ中と聞いて、早くなつてほしいなと思いながら、次の任地、デンマークに移ってしまったわけです。

文化庁長官表彰はいろんな分野で前からやっておりますが、19年度から文化芸術創造都市部門を始めたわけです。既に12の都市を表彰しております。そして、もう少し具体的なご支援をしようということで、21年度から文化芸術創造都市推進事業というのを始めました。さらにもう一歩進んで今年度から文化芸術創造都市モデル事業ということで、同じことを目指している都市の方々に知っていただくきっかけになればと思った次第です。

私がユネスコ大使でパリにおりましたときに非常に関心があって、ナントというまちに行

きました。エローさんというすばらしい市長が出て、文化を再生の中心に据えて大成功したわけですね。そのプロジェクトの1つがクラシック音楽のラフォルジュルネというので、これは日本も6年前から東京で始め、そして今金沢と新潟にも広がってるようですが、その現場に3年続けて見に行きまして、私なりに勉強してきました。中央集権的なフランスですが、もともと地方には自分でやるんだという意欲なり伝統があったんだろうと思います。

必ずしもそうでもない日本は、初めのうちは中央政府のほうである程度の枠組みを示したほうがやりやすいのかなと私は理解をしております。と同時に、鳩山政権のときに新しい公共とか地方主権ということを行いました。これは正論だと思いますが、必ずしも物事は動いていないと思います。しかし、進むべき方向であることは間違いないので、創造都市ということで地方が特色を生かして活性化できれば、その嚆矢になると思います。これだけ成功例が出始めたので、うれしく思いました。したがって、問題はこれをどう拡大かつ持続していくか、この辺をもしチャンスがあれば次の討論でお話をしたいと思います。

○河島伸子氏

ここから30分強時間がありますので、幾つかの論点を皆さんと議論したいと思います。まずは個々の創造都市をどう成功させていくかというあたりで、1つは政策が実際の効果を見せることが重要であると思いますが、そのあたりについてどなたでも結構ですが、衣笠さん、何かありましたら。

○衣笠収氏

今回のモデル事業も評価の基準として定量的なものと定性的なものをどういった項目でやっていくかと非常に悩みました。どうしても数値的なものになってきますと、参加人数といった話がメインになってしまいます。持続ということで重要なのは、何らかのイベントとか仕掛けというのは都市でも行われてるんですが、その結果、生活としてどういった創造的な活動が残っていくかということだと思っています。

○河島伸子氏

ありがとうございました。ほかの方がいかがでしょうか。入内島さん、もしお考えのことがあれば。

○入内島道隆氏

政策効果には2つあると思います。1つは数字であらわせるものですよね。例えばビエンナーレやることによって、お店に行列ができて、こんなに店が忙しかったことはなかったということが実際に起こっています。もう一つは数字であらわせない精神的なものがあると思います。作品を見ることによって、今まで見えなかったものが見えてきたり、感じられなかったものが感じられたり、心が豊かになったりとか、そういうものがありますので、2つ政策効果はあるのかなというふうに思います。

あと、こういう経済情勢になりますと、文化に何でお金かけるんだというのがありますので、そういうのを説得しながらやっていくのが行政の課題です。

○河島伸子氏

では次に、太下さんに同じ問題で伺いたいのですが、海外などではそのあたりは何か工夫してやっているのでしょうか。

○太下義之氏

例えばイギリスなんかのクリエイティブ・インダストリー政策なんかでは、かなり税金が投入されていますので、実にさまざまな効果検証のResearchが行われています。ただ、そういうことというのは、病膏肓に入るみたいなのところもあって、何か無理やり数値をいろいろひねくり回して効果がある、ないみたいなことになりがち側面もあるなと思っています。

こういうクリエイティブシティ、または創造産業的な政策を展開していったら、最終的にどうなっていけばいいのかと考えると、クリエイターとかアーティストが自立してその営みを続けていける社会が1つゴールになるのかなと考えています。その意味では、先ほど中之条町の入内島町長さんのほうから、アーティストやクリエイターの方が30超えると普通の人になっちゃうというお話もありました。ここで何か別の展開ができないかと思っています。

アーティストやクリエイターが大変だなと思うのは、日本って美大とか音楽大学いっぱいありますけれども、そこを出たからといってアーティストやクリエイターになれるわけじゃ全くないわけです。社会はキャリアデベロップメントプランを示してくれてないんですね。その点、例えばサラリーマンは、平社員から始まって係長とか課長とかなっていったら、能力とやる気があれば経営サイドにも入るとか、1つのキャリアのパターンがあります。行政マンしかり、研究者もそうですよね。

しかし、成功したアーティストやクリエイターの事例調査をすると、ある程度のキャリアデベロップメントのパターンがあるはずなんですね。例えば、海外で一定期間レジデンスをするであるとか、または日本国内も含めてですけれども、ギャラリーとか、またはパフォーミングアートをやるとか、節目になるポイントは確実にあると思いますので、そういったところに支援をつなげて、30歳を超えてもアーティストやクリエイターが続けられるような政策をぜひ文化庁さんにやっていただきたいなと思います。

そういったインフラストラクチャーがある中で、個々の都市がアーティストを迎え入れて、何か新しい展開をするとか、国と地域の役割分担みたいなものも今後はより真摯に考えていかななくてはいけないと考えています。

#### ○河島伸子氏

ありがとうございました。アーティストやクリエイターにキャリアデベロップメントというか、ある種のパターンがないというのはそのとおりです。おっしゃるように海外ですと、若手の新人の賞をとって、それから中堅になるとこういう賞をとったり、次にはレジデンスに選ばれるとか、幾つか、それも国際的に知られた仕組みがあると思うんですね。

それと、よく日本の文化団体やアーティストたちが言うのは、やはり評価の仕組みです。新聞等載るような芸術の批評が日本では育っていないので、公演などでも小さい紹介があって終わりということなど、常々問題として言われていると思うんですね。おっしゃるように創造都市を育てていくためにはそういうインフラも必要だと理解しました。

近藤長官、いかがですか。拡大、持続が重要をとということで問題投げかけていただいたんですが、お考えがおありでしたら。

#### ○近藤誠一氏

効果について一言。効果というのはまさに今私が直面してる最大の問題です。けさほど伺った兵庫県立芸術文化センターでは、経済効果を産業連関表を使って数字を出しておられます。それはできる限りやったらいいと思います。他方、やはり定性的なものも、単に、よかった、よかったという人が7割いたとか、それが8割に増えたというだけでは、いま一つ説得力に欠けるんだと思います。したがって、例えば芸術家が小学校に行っているいろいろ体験授業をする、それによって不登校の学生の数が減ったというのであれば、そういったエピソードをたくさん集めることで定量的に近い評価ができるのではないかと考えております。

企業メセナ協議会というのがございますが、この間その会合に出ましたら、企業メセナでどういう効果が上がったかというエピソードを集めることにしたと言っていました。全国的にいろいろな活動をやっている中でこういういい効果があったということをたくさん集めることで、それなりの説得力あるものができるかなと思います。そういう効果が次第に浸透していけば、それならうちもやってみようというところが出てくる。それが拡大持続につながります。

#### ○河島伸子氏

ありがとうございました。それでは、次の話題に移りたいと思います。きょうの5つの事例を伺っていて、従来の文化行政とかアート支援といった分脈で語られていた事例と大きく違うところが1つありまして、それは芸術文化とまちづくりの中でマーケットをつくっていきこうということが最初から構想に入っていて、実際やっているということなんですね。

例えば、金沢の事例でもまさにそれが意識されていたと思いますし、最初の篠山市ももちろんそうでしたし、それから中之条町もつむじというカフェをつくったりだとか、アーティストたちにかかわってもらっています。従来の文化支援ですとここまでマーケットとアートをくっつけた形で議論するということは余りなかったんですね。

どちらかというアート支援というのは助成金を出したり、何か活動ができるようなインフラを整えていきたいと思いますという話でした。創造都市のレベルになるともう一つ先があるなと興味深く伺ったんですが、実際どの程度うまくいくものなのか、それから問題点といったものについてお話しいただきたいんですけども、衣笠さんはいかがですか。

#### ○衣笠収氏

確かにこれまでの助成というのは、その活動がどう社会的なものに貢献していくのといったものではなかったと思います。神戸市の場合、先ほどデザインという言葉を使ったのはまさにそういうことで、創造的な力をいろんな社会課題につなげて、解決を図っていくということです。例えば福祉の現場でどういった効果をあらわしたのか、といったことをやってきたわけですが、そういう、創造的な力というのは人にいろんな力を与えるものだという事例をわかりやすく発信し、体験する場づくりをしていくのが非常に大事なかなと。そのために今回のモデル事業は非常にいい機会になったと思っています。

○河島伸子氏

ありがとうございました。では、入内島さん、いかがですか。マーケットの点で。

○入内島道隆氏

新しいマーケットをつくっていくということで、つむじでは今まで売ってなかったようなものを売ってます。例えばアーティストがつくったTシャツが1枚7,000円するんですね。でもその1枚7,000円のTシャツは、アーティストがその日の気分によってデザインして1点物なんです。そういうのを地元の人を買うかというのと、やっぱり1枚780円みたいなシャツを求めるわけです。でも、カルビーの元社長さんなんか来て見ていただいたときに、その7,000円のシャツを奥さんの分も買って、こういうものを置かなきゃ地方の発展はないんだよとってくださいました。

私たちのまちにも8人のアーティストが逗子とかそういうところから引っ越してきて、自分で好きな家を見つけて住んでるんですけども、作家さんのネットワークというのがありまして、そういうことがちょっと新聞に出たら全く違うところから、どうしたら中之条に住めるんですかという問い合わせがあったりします。リチャードフロリダ教授は3つのTと言いますが、地域の寛容性というのをすごくアーティストは求めていると思うんですね。そういうものをつくっていくことによって新たなマーケットが副次的に生まれてくるんじゃないかなと私思っています。アーティスト50人に引っ越してもらうのが私の目標です。

○河島伸子氏

ありがとうございました。太下さんも同じことを伺ってよろしいですか。

○太下義之氏

ご当地、神戸市さんはデザイン都市ということでユネスコのクリエイティブシティズネットワークの認定を受けているわけですが、デザインという言葉が非常に広く解釈して使われているというのが特徴だと思うんですね。イギリスのクリエイティブインダストリー政策で言われているデザインというのも非常に広い概念で使われています。せっかくだからスライドをちょっと使いながら説明します。

例えば、これは椅子なんですけど、普通の椅子と違ってちょうど座ったときに両足の間ぐらゐに切れ込みが入っています。カフェとかレストランで置き引きを防止するデザインのいす

なんですね。イギリスのデザイン政策の一環として行われたデザインアゲインストクライムという、その名のとおり犯罪を抑止するデザインって何だろうと考えるプロジェクトなんです。こういった椅子であるとか、例えば犯罪の少ない公園とはどういう公園なのかとか、こういう具体的な形に落ちていくわけですけど、多分日本語で言ってるデザインとはちょっと違う広がりを持った展開がここにあるんじゃないかとお気づきになると思うんですね。

イギリスではこれ以外にも例えばデザインバグズアウトというプロジェクトがあって、バグというのはコンピューターでよく使われますけど、ばい菌とかのことですね。バグをアウトしちゃおう。これは何かというと、病院の中の院内感染ですね、これをどうやったら減らせるのかということを経験関係者とデザイナーが一緒になって考えるプロジェクトです。例えば、みんなが手を洗えば院内感染は起こらないだろうという仮説を立てて、じゃ、みんなが喜んで手を洗うような手洗い場ってどんなものなのかというデザインに落ちていくわけですね。先ほど神戸市さんおっしゃったように、社会的な課題を解決するためにデザインというものがあるという、そういう思想に立ってるわけです。

これの何が強いかというと、単純なプロダクトデザインであればすぐに模倣されますけども、このプロセスのデザイン、社会的な課題の解決のデザインというのは一種のコンサルティングビジネスなんですね。だから、絶対模倣はされないわけです。非常に知的付加価値の高い産業セクターになり得るわけですね。こういったことをイギリスではデザイン政策という名のもとに展開してるわけですので、日本においてもクリエイティブ産業政策、またはクリエイティブシティ政策というものを展開するときに、従来のように文化のための文化振興ということではなくて、文化が幅広い社会的な課題の解決に役立つと、こういう観点から文化の振興を行っていくことが必要じゃないかと思います。

○河島伸子氏

ありがとうございました。近藤長官、文化庁としてもそういう文化芸術が新たなマーケットをクリエイティブしていくということについては賛成のお立場ですか。

○近藤誠一氏

もちろんそうですね。日本政府として今最大の問題の1つは経済、内需が伸びないということですね。回りを見回してみますと、生活必需品は大体みんな持っておられると思うんです。これから消費をふやすとすれば何かというと、洗練された格好いいもの、いいデザイン



のもの、それなら買ってみたいと思う、そういうところにカギがあると思います。

芸術分野というのは新しいマーケット、潜在的に大変なマーケットがあるし、それをうまく創造都市というステップでつくっていくことによって経済が回り出す、そういう可能性は十分に私はあると思っています。

#### ○河島伸子氏

ありがとうございました。だんだん時間が押してまいりました。本来でしたらネットワークの話をして、それで最後にもう一言ずつまとめをお願いしようと思っていたのですが、あわせた形で、創造都市のネットワークについてお話いただき、まとめていただこうと思います。よろしいでしょうか。それでは、衣笠さんからお願いします。

#### ○衣笠収氏

それぞれの都市がきちっと取り組みをして、ネットワークで情報交換というか交流するというのは、お互いが尊重し合えて、互いに発展していける場になると思います。具体的に芸術あるいは文化の力がどのように地域に役立てたのか、そういったエピソードをお互い共有していくことも大事ではないかなと思います。

#### ○入内島道隆氏

平成の合併のときに、合併して村になろうと私言ったんです。田舎のよさを、本来の特性を生かした地域づくりをするには、やっぱり市じゃなくて村だと思ってそう発言したんですが、なかなか理解してもらえませんでした。この創造都市に関しても、私のような小さなまちで創造都市を目指していくと言ったら、頭おかしいんじゃないかと言われるかもしれません。でもネットワークがあって、文化庁もバックアップしているということになれば、それが新しい流れなんだと理解してもらえるんですね。ですから、そういうネットワークをぜひ私つくっていただければありがたいと思っています。

#### ○太下義之氏

今、入内島さんもおっしゃったんですけれども、創造都市というと格好よ過ぎるというか、多分多くの中小都市にとってみるとちょっと敷居が高いような、そんなイメージも実はあるんじゃないのかなと思ってました。一方で、きょう佐々木先生からも創造農村のようなお話

も出てまいりましたが、そういう部分も含めた広いネットワークが今後は大きな可能性を持つてんじゃないかなと思っています。

先ほどユネスコのクリエイティブシティズネットワークの7つの分野を紹介しましたが、その7番目に食文化、ガストロノミーという分野があります。今まで日本では食文化をアートのカテゴリーとしてはとらえてこなかったと思いますが、実は日本の食というのは非常にレベルが高いわけですね。こういう食文化をもっと生かしていくという方法もあるかなと思っています。

今、日本はTPPの話で大きく揺れてますけれども、農業はかなり大きな影響を受けることになると思います。その際に1つ可能性としてあるのは、地産地消と言いますか、イタリアでいうスローフード運動の形で、現地に来てもらってその食材を食べてもらうというのが、農産物を一番付加価値高く市場に出す方法じゃないかと思っています。そういった中にクリエイティビティとか文化を組み合わせ、第一次産業をクリエイティブな産業として再生することができれば、この新しい創造都市、創造農村のネットワークというのは非常に意味のあるものになるんじゃないかと思っています。

#### ○近藤誠一氏

物事を進める上で2つのやり方があると思います。1つはトップダウンのピラミッド型、1つは水平的なネットワーク型。強い軍隊をつくらうと思ったらトップダウンのピラミッド型が必要。21世紀の民主主義の中で強い社会をつくらうと思ったらネットワーク型だと思います。それは、自由で創造的な発想がそれによって生きる、つまり上から押しつけられるんじゃない、みんなが自由に考えられる、そしてほかの人とそれが共有できる、学べる、そしてまた自分の発信もできるからです。

特に創造都市を目指す都市同士が水平なネットワークでつながることによって、お互いに強め合う。これは今国内のおっしゃいましたが、私はぜひアジアの、そして世界の創造都市とのネットワークをどんどん広げていただきたいと思います。実は私もアジアの中で芸術都市ネットワークというものをつくりたいと思っておりまして、ユネスコとか、あるいはヨーロッパのネットワークとつながることもいい。ネットワークとネットワークがつながることで、ものすごく範囲が広がります。

特に国際的なネットワークについては大使館を活用するという手もありますので、私ども政府としてもお手伝いができると思います。ぜひネットワークをどんどん進めることでそれ

ぞれが学び、そして自分独自の方法で発展していく、そういうことを期待しています。

○河島伸子氏

どうもありがとうございました。長時間にわたり皆さんご協力いただきましてありがとうございました。大変興味深い事例と、それから全体を俯瞰する太下さんのお話と、政策のお立場から近藤長官のお話も伺えて、興味深いパネルディスカッションが開けたと思います。どうもありがとうございました。

### 《第3部 全体討論》

第3部では佐々木雅幸氏（都市文化創造機構理事長・大阪市立大学教授）がモデレーターを務め全体討論を行いました。発言は6人からありました。その後、NPO法人都市文化創造機構が「創造都市ネットワーク日本（仮称）の構築に向けて」とする提案を行いました承されました。

○佐々木雅幸氏（都市文化創造機構理事長・大阪市立大学教授）

さまざまな素材や論点が出ておりますので、大体ひとり2、3分ぐらいで感想なり質問なりを出していただいて、その上で最終的なまとめに持っていきたいと思っております。まず挙手をされて、お名前と、所属を言いたい方は所属と、そしてできるだけ要点をおまとめいただきたいと思っております。

では、どなたでも結構です。後藤さん、どうぞ。今お二人ほとんど同時に手が挙がりましたので、その次が八木さんということで。

○後藤和子氏（埼玉大学教授）

埼玉大学の後藤です。私は3つのことを申し上げたいと思っております。1つは、政策の効果を見るうえで、財政を見るということがあると思っております。第二次世界大戦以後、農村においても農業以外の所得のほうが増えて、しかも財政依存度が強くなっている傾向が圧倒的でした。その原因は公共事業だったわけです。これをどう変えていくかということが非常に大きな課題になっています。

そのために民主党政権になって、農村で雇用を生み出すためには介護であるとか医療であるとかいろいろ言われてるわけですけど、これをクリエイティブ産業に変えたらどうかということで論文を書きました。きょうご報告いただいた特に篠山などは大合併で相当財政状況に影響があったのではないかと思っていたので、こういうことをどのように考えて創造都市の政策をやってらっしゃるのかということをお聞きしたいなと思いました。

それから2番目は、もともとあるその地域の基幹産業との関係をどう考えるかということがあると思うんですね。例えば篠山でいうと立杭焼というような陶芸があったりとか、それから丹波の農産物というのは既に非常にブランド化されているということで、そういう基幹産業とクリエイティブシティでやってるような取り組みをどういうふうにつなげていくのか。それから、中之条であれば四万温泉というのが背後にありますから、そういうことをもう少し考えていくべきじゃないかなと思いました。

それから3番目は、先ほどの新しいマーケットをつくっていくということです。これは非常に重要な論点でして、むしろ中国などがメガイベントをマネジメントする大学の教育というのをものすごくやっています。つまり上海万博をやることによって上海という都市を世界的にブランド化して売り出すんだと。先ほど河島先生おっしゃいましたけれども、日本でアーティストを高く評価して、日本から発信されていくアーティストとか作品とかいうものはありません。国際的な評価を勝ち取っていくために、ネットワークをつくって、自分たちでブランド化していくことを考えてもいいのではないかと思いました。

○佐々木雅幸氏

質問があった篠山とかは、あとで時間があったら私のほうから投げかけるとして、しばらくこのまま続けましょう。八木さんどうぞ。

○八木 匡氏（同志社大学教授）

同志社大学の八木でございます。2点だけコメントさせていただきます。第1点目は評価の問題です。例えば神戸市のデザインセンターの評価を考えたときに、実はあそこでやっていることは、企業でいうR&Dではないかという気がします。マーケットプレイスにのっているようなアートクリエイションを付加価値を高めていったりイノベーションを起こしていくためには、実は裏側でこういった新しいダンスボックスみたいなアクティビティがR&Dアクティビティとしてされていて、そのエッセンスを新しいイノベーションに使ってるという

側面があることを考えないと、おかしいのではないかということです。

2点目というのは、ネットワークの問題なんですけど、ネットワークを結成することによって、どういうコストを削減できるのかということが明らかになる必要があるんじゃないかと。例えば、一種の情報発信機能をネットワーク全体で支えることによって、コスト削減みたいなものが可能だとか、そういう具体的なメリットを議論する必要があると思いました。

○佐々木雅幸氏

ありがとうございました。他にいかがですか。どうぞ。

○氏名不明

まず文化庁長官にお願いしたい。こういう会合を年何回やられてるんでしょうか。それとPRをどうしてるのか。それから、世界の例、それから各成功例、文化庁のホームページに掲載されてるんでしょうか。

○佐々木雅幸氏

どうもありがとうございました。今ご質問もあったので、私の知る範囲でお答えしておきますと、文化庁のホームページにこの事業の告知、それから過去の調査物のデータはすべて載っておりますので、お帰りになったらぜひ確認ください。この事業は、2007年から長官表彰で毎年4つの都市を選んでますね。そして、ネットワークを推進する事業というのが2009年から始まりました。2010年からモデル事業が始まっています。たまたま私ども都市文化創造機構が提案したものが公募・採用されましたので、一昨年の9月に横浜市の協力を得て創造都市ネットワーク会議をやり、昨年の1月に大阪市で創造都市政策セミナーをやり、そして昨年の9月には横浜市で創造都市政策セミナー、そして今回がネットワーク会議という形で、セミナーとネットワーク会議をそれぞれ2回ずつ開催しております。

それでは、ほかにご意見ありましたら、こちらのほうでも何か。ちょっと質問が途切れたようですので、先ほど篠山はどうなってるとか聞かれたこととで、もしお答えができるようであればお願いします。篠山市副市長の金野さんです。

○金野幸雄氏（兵庫県篠山市副市長）

平成の大合併の第1号都市として取り組んで、特例債なども大分使わせていただいた関係

もあって、インフラは整ったけれども、現時点で借金返しのピークが来てますので、非常に財政が悪い。将来負担比率が全国ワースト10に入っております。そのような財政状況でまちづくりをどうするかというと、いかに役所の予算に頼らずにするかということです。

その点で、ラッキーだったのが文化芸術創造表彰を平成20年に受けたことです。これは市民の力だったと思います。田園交響ホールという800人のホールですけど、開館当時からボランティアで運営する仕組みできてますし、河原町というところで、アートフェスティバルを市民の方たちがみずからやっていますが、火事で焼けた2軒の建物をファサードだけ残して再生することを、人手もお金も知恵も全部市民レベルでやりました。こういうことも評価されての長官表彰だったと思っております。

もう一つ質問いただいた、基幹産業である農作物とクリエイティビティの関係ですが、篠山は黒豆、マツタケ、栗など、イノシシも今あります。非常に一次産業が強いということで、二次、三次になかなか行かない。ここを伸ばしていくのが必要かなと思っております。

お金がなくてまちづくりをする、要するにソーシャルビジネスでそれを乗り越えていくということですね。3本柱で考えております。1つが空き家の活用です。篠山の場合はマニアの方は喜ばれるような古民家ですね、150年、200年というのもいっぱいございますし、茅葺き民家だけで1,300棟もあるということです。これを使っていこう。それから、今ご指摘いただいたスローフードビジネス、六次産業化をやりたい。それと、クリエイティブ暮らしのツーリズムもやりたいと、この3本柱で底上げをしたいと考えております。

○佐々木雅幸氏

どうもありがとうございました。創造農村でもうちちょっとだけご意見を伺いたい。木曾町長の田中さんが来られてますので、ご紹介兼ねてご意見をいただきたいと思っております。

○田中勝巳氏（長野県木曾町長）

今、先生からご紹介いただきました長野県の木曾町の町長の田中といいます。創造農村を目指してこの間いろんなことをやってきました。たとえば、クラフトを中心にした創造産業をずっと努力をしてきました。それから、木曾音楽祭がありまして、これはもう日本でも草分けの音楽祭でありまして、室内楽の音楽祭としては恐らく日本でトップの音楽祭だろうと思っております。特に首都圏あたりからいっぱい来るといふ音楽祭でもあります。

それからもう一つ、きょう太下先生から食の創造都市という話がありまして、うちは、皆

さん聞いたことないと思うんですが、「すんき」という食べ物があります。塩分を使わない漬け物でありまして、世界に例のない、小泉武夫先生に言わせると国宝級の伝統食品だそうです。今これを世に広めるということと、それから植物性乳酸菌で漬けるものですから、植物性乳酸菌を使った新しい産業ということに努力をしております。つい最近はヨーグルトを植物性乳酸菌でつくることに成功して、発売をしました。もう製造はとて間に合わない、非常においしい食べ物になりました。今特許も準備してありますが、すんきも町が特許申請をしております、それからその他のいろんな食品にも挑戦しています。そんなところでお許しをいただきたいと思います。

○佐々木雅幸氏

お二人にお答えいただきました。もう1つ、2つご意見を伺う時間はあると思いますが、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

○山川龍巳氏（坊ちゃん劇場）

松山の坊ちゃん劇場の山川と申します。生活必需品の文化創造をどんなふうにしていくのかというのを考えて松山に行ったわけですが、年間270回ほどの公演をしています。8万人から9万人のお客さんに来ていただいています。とにかく命懸けの仕事です。この事業にお金を出す経営者がいたということが非常に大きいと思います。要するに生活必需品の歌や踊りではない文化が、生存の必需品としてこれからは必要だろうと思ってくれた。これはわらび座が非常に大事にしてきた文化芸術のメッセージです。

これからの時代には新しい地域素材をどんなふうに見せていくかということが重要だと思います。結局そういうことがデザインに結びついていきましょうから。そういうことが改めて全国レベルで確認ができたということですね。そういうことを思いました。

○佐々木雅幸氏

どうもありがとうございました。他になければ、そろそろまとめに入らせていただきます。

2000年前後から日本の各地でいろいろな新しい創造都市のチャレンジが始まって、約10年になります。私は最初、日本ではこういう考え方は広がらないんじゃないかと思っていたわけですが、むしろ反対に、一部の人には強く応援いただきました。特に私にとっては、一番の応援をいただいたのは亡くなった井上ひさしさんです。それからきょうは来てませんが、

平田オリザさんですね。二人は直感的にこの考え方はいけると思ってください、それでいろんな形で応援をしていただいた。そのことが社会的に次第に広まってきたことの1つであるかもしれません。

そしてまた、きょうお話が出ましたようなユネスコが新しい考え方に基づいて、文化多様性という言葉とあわせて創造都市ネットワークという言葉で提唱した。その時の考え方は、だれも知らないような小さな都市でも創造的になるということ。そのことが文化多様性を高めるということだと。そのネットワークを組んでいこうということだったと思うんです。これは私は1次元が広がったことだと思っております。

昨年、横浜のほうで、ロンドンのストリートワイズオペラのリーダーであるマート・ピーコックさんがとてもおもしろい図を描きまして、1つの木の絵を描くんです。そして、地面の下の根っこが大事だと。文化というのはまさにそこに力を与えることなんですね。その見える部分と見えない部分をどうやってきちんと理論化していくかということ。これは私は文化資本という概念で説明できるのではないかと考えてるんですけども、いずれにしてもそういう問題にチャレンジするということですね。

それから、後藤さんから出された問題もそうなんですけど、実はイギリス政府が進めているような13業種の創造産業というのは、当然ですが大都市に集中します。大都市のマーケットで、ほっとけばそちらにどんどん吸い寄せられていきます。そこで今新しい地域間格差が生まれているのです。それは新自由主義のもとでどんどん広がっていきますから、抑えなくちゃいけない。そういった意味でいけば、都市間競争ではなくて都市間連携です。大中小それぞれの規模の都市や農村がお互いに助け合う、支え合うことによって、行政コストを効率にでき、いっぱいチャンスが広がると思います。

そんなことを考えながら、お手元にある提案を準備しております。A4の1枚物ですが、「創造都市ネットワーク日本（仮称）の構築に向けて」というものでございます。簡単に読み上げさせていただきます（読み上げは割愛。別紙・資料参照のこと）。

賛成がいただけたら盛大な拍手をいただきたいと思います。よろしく願います。（拍手）。ありがとうございました。それでは、第3部はこれにて閉じさせていただきます。

終了